

令和8年度 学校評価 前期報告書

津幡町立英田小学校

〔学校教育目標〕『進取・敬愛・剛健』の精神を基調とし、「自ら学び・心豊かで・たくましい児童の育成」をめざす

90%以上：A、89.9～80%：B、79.9～70%：C、69.9%以下：D

7月

重点 目標	具体的取組 ※経営計画の重点との関連		担当	評価と観点・評価対象	実現状況の達成度 判断基準	判定基準	備考	達成度	判定	成果と課題・改善策
1 授業力向上と学力の 定着	① 町2	(1)－① 教科等の資質・能力の育成に向けた児童主体の授業づくり	学習指導部	【成果指標】 〔教師アンケート〕 ・資質・能力を育成するために ①ミカタカードを活用して、数学的な見方・考え方を働かせる授業を行うことができた。 ②事前につまづきを想定し、それに対する手立てをとることができた。	① A:該当するどの授業でもできた B: 8割の授業でできた C: 6割の授業でできた D: 6割の授業より少ない ② A:該当するどの授業でもできた B: 8割の授業でできた C: 6割の授業でできた D: 6割の授業より少ない	A+B	・できていない 職員には、他のクラスの授業を参観する機会を設ける。	教師 ①91% ②91%	A	・単元を貫くミカタカードを作成することで、授業ではねらいにせまることができ、児童の理解や思考を深めることができた。また、ミカタカードを活用するよさを実感する児童が増えてきた。しかし、既習とつなげたり活用して考えたりできる児童が一部に限られているという課題が残った。既習とつなげたり数学的な見方を活用したりして考える力は、短期的に身に付くものではなく、持続的な育成が必要であるため、今後もよい児童の姿を価値付け、よさを実感させていきたい。
	②	(1)－② 学習規律・学び方の確立		【努力指標】 〔教師アンケート〕 ・安全・安心な風土の中で児童主体の授業を行うために、「学習のルール」が身につくように指導することができた。 【満足度指標】 〔児童アンケート〕 ・「学習のルール」が身についている。	A:できた B:まあまあできた C:あまりできなかった D:できなかった A:身についている B:ほぼ身についている C:あまり身につけていない D:ほとんど身につけていない	A+B	・できていない場合は、教師アンケートの回数を増やして意識を高める。	教師 100% 児童 93.3%	A	・児童主体の授業を目指すからこそ、学習のルールを確立することが重要になってくる。その重要性を教員全員が共通理解し、学習目標の取組等を活用して指導することができた。指導を続けてはいるものの、児童全員に身に付いているとはいえない。今後もその重要性を児童と共通理解しながら、指導を継続していきたい。
	③ 町3	(1)－④ 小・中の一貫した指導を見据えた、外国語教育の推進		【努力指標】 〔教師アンケート〕 ・CAN-DOリストをもとに、単元における目標を明確にし、児童が見通しをもって学習できるように指導することができた。 【満足度指標】 〔児童アンケート〕 ・何ができるようになればよいのかが分かり、それにむかって学習することができた。	A:できた B:まあまあできた C:あまりできなかった D:できなかった A:できた B:まあまあできた C:あまりできなかった D:できなかった	A+B	・単元の始まりで、CAN-DOリストを確認する。	教師 100% 児童 (5・6年) 92%	A	・単元の導入時と単元の終盤でCAN-DOリストを確認した。その単元で何ができるようになればよいのかを明確にした。また単元の終盤にも再度確認し、自分の到達度を確認するとともに、課題がどこにあるのか（話すこと、聞くこと、書くこと）を実感し、個々の課題解決のための時間を確保することができた。 ・児童と教師、ALTが何ができるとAなのかを共有することで、同じ基準で評価することができた。

重点 目標	具体的取組 ※経営計画の重点との関連		担当	評価と観点・評価対象	実現状況の達成度 判断基準	判定基準	備考	達成度	判定	成果と課題・改善策
2 豊かで健やかな心身の育成	④	(2)－① 児童理解に基づく 個に応じた特別支 援教育の充実	生徒指 導部	【努力指標】 〔教師アンケート〕 ・個別の支援が必要な児童に対し、保 護者や地域支援室等と連携し、共通 理解を図りながら全職員で対応して いる。	A:できている B:ほぼできている C:あまりできていない D:ほとんどできていない	A+B	・支援の方法や役割分担を明確 にし、児童理解の会や終礼等で 共通理解を図っていく	教師 100%	A	・必要に応じてケース会議や保護者面談を実施し 支援方法の検討・見直しを行う事ができた。 ・通級指導担当やスクールカウンセラーによる校 内研修を実施し、教職員の専門性の向上に努め た。 ・学校だけでは解決が難しい課題については、関 係機関と積極的に連携しながら、支援体制の充実 を図る必要がある。
	⑤	(2)－② 自己肯定感・自己 有用感を高める人 間関係づくりの推 進		【満足度指標】 〔児童アンケート〕 ・友達を傷つけることを言ったりした りせず、やさしい言葉遣いを心が け、思いやりのある行動をとってい る。 〔保護者アンケート〕 ・わが子は、友達を傷つける言動を とることがなく、思いやりのある行 動をとっている。	A:できている B:ほぼできている C:あまりできていない D:ほとんどできていない A:できている B:ほぼできている C:あまりできていない D:ほとんどできていない	A+B 児童アン ケート・教 師アンケー トの二者評 価で総合的 に判定す る。	・普段から「いいねカード」の 取組を行い、互いのよさを全校 放送等で広めていく。その中 で、やさしい言葉遣いや心が け・思いやりのある行動につい て紹介する。	児童 88.7% 保護者 93.2%	B A	・保護者アンケートでは、肯定的な回答の割合が 前年度の同時期と比べて大幅に向上した。学校目 標である「やさしさと笑顔あふれる学校」を目指 した取組が、思いやりの心の醸成につながってい るものと考えられる。 ・一方で、毎月実施している生活アンケートで は、児童の訴えの約8割が「冷やかしやからか い、嫌なことを言われる」といった言葉によるト ラブルに関する内容であった。 ・そこで、2学期は高学年が中心となり、「言葉 の使い方」について全校で改めて考える機会を設 ける。ふわふわ言葉を増やし、ちくちく言葉を減 らすことを目的とした取組を提案・実践すること で、高学年が手本となり、互いを思いやる言葉遣 いが学校全体に広がる風土の醸成を目指してい く。
	⑥	(2)－③ いじめの未然防止 と早期発見、迅 速・組織的な取組 の確立		【努力指標】 〔教師アンケート〕 ・ソーシャルスキルトレーニングを通 して、人間関係の構築に必要なスキ ルが身につくように指導することが できた。	A:できた B:まあまあできた C:あまりできなかった D:できなかった	A+B	・参考図書の活用 ・全校集会などの場で、ソー シャルスキルトレーニングの目 的や方法を紹介する。	教師 100%	A	・昨年度に引き続き、年間計画に基づいてソー シャルスキルトレーニングを実施することができ た。今年度は新たに「心の日ふりかえりカード」 を作成し、児童が身に付けたスキルの積み重ねを 振り返り、自らの成長を実感できるようにしてい る。今後も全校で統一した指導を継続し、児童同 士のよりよい人間関係の構築に必要なソーシャル スキルの育成を目指していく。
	⑦	(2)－④ めざす姿の共有と 規範意識、自己指 導能力の向上		【努力指標】 〔児童アンケート〕 ・いじめは、どんなことがあっても してはいけないと思っている。 〔教師アンケート〕 ・アンケートや個人面談等から、いじ め等の実態を探り、全ての事案につ いて、迅速・組織的に対応してい る。	A:絶対いけない B:いけないと思う C:あまりいけないと思わない D:いけないとは思わない A:できている B:ほぼできている C:あまりできていない D:ほとんどできていない	A+B 児童アン ケート・教 師アンケー トの二者評 価で総合的 に判定す る。 児童アン ケートは、 100%以上を めざす。	・児童アンケート及びいじめ調 査を実施し、実態を把握する。	児童 97.8% 教師 100%	A A	・いじめの積極的な認知に加え、解消に向けた具 体的な支援や働きかけについて教職員間で共通理 解を図ったことで、いじめの解消件数が増加して いる。また、不登校児童数及び不登校傾向児童数 は、昨年度の同時期と比較して減少傾向にある。 今後も、認知件数を減らすことを目的とするので はなく、「いじめを見逃さない・見過ごさない」 という姿勢を全教職員で共有し、早期発見・早期 対応に努めていく。
				【努力指標】 〔教師アンケート〕 ・生活目標を通して具体的な姿を見 る児童と共有し、工夫しながら指導して いる。	A: 9 割以上の児童が達成している B: 8 割以上～9 割未満の児童 C: 7 割以上～8 割未満の児童 D: 7 割未満の児童	A+B	・毎月各クラスの具体的な姿を 掲示することで意識の継続を図 る。 ・達成度を振り返り、児童への 意識化を図る。	教師 100%	A	・どの学級においても、生活目標をもとに目指す 児童の姿を具体的に共有するとともに、掲示物を 活用することで、児童の意識の継続を図ることが できた。 ・今後は、放送等を活用して各学級の取組や成果 を全校で共有し、取組の成果を見える化すること で、児童の意欲を高め、次の取組へとつなげてい きたい。

重点 目標	具体的取組 ※経営計画の重点との関連		担当	評価と観点・評価対象	実現状況の達成度 判断基準	判定基準	備考	達成度	判定	成果と課題・改善策
2 豊かで健やかな心身の育成	⑧	(2)－⑤ 児童の主体性・表現力を高める活動、児童発信型の取組の推進	特別活動部	【努力指標】 〔教師アンケート〕 ・ふれあいグループ活動において、児童がめあてを意識して活動できるように指導している。	A:できている B:ほぼできている C:あまりできていない D:ほとんどできていない	A+B	・担任が学級で事前指導を行うことができるよう、職員会議や終礼で周知する。	教師 92.3%	A	・学年ごとのめあてを設定したことで目指す姿が具体化し、児童にめあてを意識させる指導ができた。 ・今後は学年ごとの役割を作るなどの工夫をし、児童がさらに自分から進んで活動できるように支援していきたい。
	⑨	(2)－⑥ 体力の向上・健康の保持増進	健康安全指導部	【満足度指標】 〔児童アンケート〕 ・体を動かすことが楽しいと感じている。	A:あてはまる B:だいたいあてはまる C:あまりあてはまらない D:あてはまらない	A+B	・児童会によるイベント等、児童が楽しく参加できる企画を行っていく。	児童 91.5%	A	・スポチャレいしかわの記録や運動に関する情報など掲示することで、児童も教師も運動意欲が高まってきた。 ・暑い日が続くと、運動する機会が少なくなるため、安全で簡単な体力アップできる環境を提示していく。 ・教師発信ではなく、児童発信での企画をしていきたい。
3 家庭・地域と共にある学校	⑩	(3)－① 関係機関と連携した、信頼される安全・安心な学校づくりと危機管理体制の確立	健康安全指導部	【努力指標】 〔教師アンケート〕 ・災害等での危機管理について児童に適切に指導し、訓練時には学校としての共通行動が取れている。	A:できている B:ほぼできている C:あまりできていない D:ほとんどできていない	A+B	・各学級で行う指導について、全校もれなく行うために、内容と実施期間をそろえる	教師 100%	A	・特に火災の際には「命のハンカチ」という分かりやすい言葉で、児童に命を守るための訓練であることを指導してきたことが身についてきた。今後も様々な場面を想定して、いつ・どこで・どんな災害が起こっても冷静に対応ができるような訓練を計画し、実施していく必要がある。
	⑪	(3)－② 生活習慣定着に向けた家庭との連携強化	生徒指導部	【成果指標】 〔保護者アンケート〕 ①わが子は、基本的な生活習慣（早寝・早起き・朝ごはん）が身についている。 ②家庭では、ゲームやテレビなどの使い方のルールを作り、守るようにしている。	A:できている B:ほぼできている C:あまりできていない D:ほとんどできていない	A+B 2つの項目で総合的に判定する。	・年4回メディアに関する取組を実施する。	保護者 ①88.1% ②79.7%	B C	・昨年度の同時期と比較して、保護者の肯定的評価は①②共に向上している。特に②の肯定的評価は10ポイント近く向上しており、家庭におけるメディア利用のルールづくりが着実に浸透してきていると考えられる。一方で、メディアは子どもたちの生活と密接に関わっていることから、今後も家庭と連携しながら継続的に取り組んでいく必要がある。
	⑫	(3)－③ 学習習慣の定着に向けた家庭との連携強化	学習指導部	【成果指標】 〔児童アンケート〕 ・宿題を含めて家庭学習を一日あたり、10分×学年程度している。 〔保護者アンケート〕 ・わが子は、宿題を含めて家庭学習を一日あたり、10分×学年程度している。	A:できている B:ほぼできている C:あまりできていない D:ほとんどできていない A:できている B:ほぼできている C:あまりできていない D:ほとんどできていない	A+B 児童アンケート・保護者アンケートの二者評価で総合的に判定する。	・家庭学習チェック表で、時間等を把握する。 ・テトルを活用し、家庭学習の取り組み方のアンケートをとったり、よい取組を広めたりしていく。	児童 88.7% 保護者 75.7%	B C	・今年度も学期に1回程度家庭学習チェック週間を設定し、時間（10分×学年）と内容（3ない「みない・たべない・あるかない」）について毎日ふり返る取組を行った。取組期間中は時間・内容を意識して家庭学習に取り組む児童が増えたものの、宿題をしてあげることができない児童も一定数いた。今後は、児童への個別指導や保護者への呼びかけも行うことで、家庭学習習慣の定着へつなげていきたい。

重点 目標	具体的取組 ※経営計画の重点との関連	担当	評価と観点・評価対象	実現状況の達成度 判断基準	判定基準	備考	達成度	判定	成果と課題・改善策
4 組織的な学校運営	⑬ 授業時数の適切な 管理と実施	運営 委員 会	【努力指標】 〔教師アンケート〕 ・月末の規計との差を意識し、調整しながら授業を実施することができた。	A:できている B:ほぼできている C:あまりできていない D:ほとんどできていない	A+B	・月末に規計との差を示すことで、翌月に意識しながら回復に努めることができるようになる。	教師 100%	A	・出前講座のような外部講師を招聘する学習が多く、教科の学習内容と時数との差を埋めていくことが難しい部分があった。しかし授業展開の工夫により、大きな差をつくらずに調整することができていた。 ・各自で時数を入力する形にしたことから、教務から示される前に自分で確認できるようになり、意識の向上につながった。 ・学期末マイナスが出てしまったことから、更なる具体的な取組が必要である。
	(4)－② 教職員の働き方改革のための効果的・効率的な業務改善 ⑭ 町1		【努力指標】 〔教師アンケート〕 ・子どもと向き合う時間や教材研究する時間を確保するよう努めた。	A:できている B:ほぼできている C:あまりできていない D:ほとんどできていない	A+B	・会議や業務内容を見直し、学校全体で業務を分担したり、教材や指導法を共有したりすることで、子どもと向き合う時間や教材研究の時間を確保する。	教師 92.3%	A	・児童理解や情報共有を基に、全職員で子どもを支える体制が整っており、多くの教師が効果的・効率的な業務改善に取り組んでいる。一方で、約1割の教員は十分な時間を確保できていないと感じていることから、業務量の偏りや時校務分掌の負担などに課題が残ることも考えられる。 ・今後は、前例踏襲となっている業務や行事を見直し、必要性を検討したり。C4thや共有フォルダー等を活用し、資料作成や情報共有を効率化したりする。
	(4)－⑤ G I G Aスクール構想実現に向けた取組や校内研修の推進 ⑮ 町4	G I G学 A習 推指 進導 り部 ・ ダ ー	【努力指標】 〔教師アンケート〕 ・ICTを効果的に活用した授業実践を共有することができた。 〔児童アンケート〕 ・1人1台端末を使って、自分の考えをもったり、新しい考えを見つけたりできた。	A:できた B:ほぼできた C:あまりできていない D:ほとんどできていない A:できている B:ほぼできている C:あまりできていない D:ほとんどできていない	A+B	・校内研修だけでなく、終礼や学年会等の短時間においても、各自が実践したICTツールや有効な指導法を積極的に共有し、学年・校種全体での活用スキルの向上を図る。	教師 84.6% 児童 97.2%	B A	・1人1台端末の活用により、児童が主体的に考えを深めたり新たな気づきを得たりする姿が見られる。これは、教師が明確な指導のねらいを持つて端末を授業に組み込んでいる成果である。今後も端末を「ねらいを達成するための有効な手段」として継続的に活用していく。 ・当初計画していた終礼やブロック会などの短時間を生かした実践・情報共有が十分に行えなかった点が課題である。2学期以降は、ブロック会や学年会等の中に「GIGA・情報の視点」を組み込んだ共有時間を設定する。教員各自が実践したICTツールや効果的な指導法を日常的に共有し合える体制をつくり、学校全体での活用スキル向上と授業改善を図る。